講　演

平泉藤原氏と北奥武士の統合

―平泉型「安全保障」体制の成立―

斉　藤　利　男※

司会　再開いたします。

続きまして、弘前大学教育学部教授の斉藤利男先生より、表題のお話を頂戴いたします。斉藤先生は、先ほど菅野先生からもお話がありましたとおり、岩波新書の『平泉―よみがえる中世都市―』で、平泉問題について独自の見解を大胆に表しまして、最近ではまた山川リブレットの『奥州藤原三代』の著作において平泉幕府論を展開しております。

それでは先生、よろしくお願いします。

はじめに

皆さんこんにちは。只今ご紹介にあずかりました斉藤です。先ほど菅野先生から岩波新書の紹介をしていただきましたが、実は、あの本は今となっては恥ずかしい本で、あれが出たのは1992年、もう22年前になります。あの本の中で当たっていたのは、都市平泉は衣川まで広がっていたというぐらいのものです。奥州藤原氏の評価については、ほんとに間違ってまして、まったく恥ずかしい思いです。自分としては絶版にしたいのですが、ただあの本は売れました。

３年前、3.11のもうちょっと後ですが、山川出版社の日本史リブレットの「人」編で『奥州藤原三代』という本を出すことができました。自分としてはこれは自信作なんですが、残念ながらあまり売れませんでした。周りから講演を頼まれて話をすると、みんなは岩波の方を知っているんですね。岩波はほんとに見解を改めねばならないと思っています。で、ちょっと宣伝をしますと、山川のリブレットは、実はある本を書いている途中で、急に頼まれてエッセンスだけを書いたものです。連休明けに脱稿して、注も付けて原稿を完成させたのは６月になってからですが。８年前から頼まれていた仕事で、講談社の選書メチエでタイトルは『平泉』、今年の早ければ10月、遅くても12月には出る予定です。内容も岩波新書とは180度違いまして、副題に「北方王国の夢」。なんか昔の高橋富雄先生みたいですが、私の結論はそこに書いてあります。実は今回の講演の依頼がこのメチエの原稿を書き終えた直後に来たものですから、書き終えたその勢いで一気に原稿を作ったら、メチエで書いたものよりももっと過激な内容になりました。それでこういうタイトルでいいでしょうかと伊藤先生にお聞きしたら、いや刺激的でいいでしょうということで、副題にこういうタイトルが付いた次第です。岩波新書で書いた奥州藤原氏についての見解は間違っていた。自分としては反省している。では奥州藤原氏と

※　弘前大学教育学部（弘前大学名誉教授）

いうのはどういう権力なのか。そして平泉政権というものはどんなものなのか。その話を、自分なりに今考えているところをお話しして、その中で、比爪藤原氏についても触れることができればと思っております。

もう１つ、私はアナログ人間で、パワーポイントを使えないもんですから、いつもレジュメを作ってそれを解説する方式でやっています。今日皆さんのお手元に３枚綴り、A4判で合計６枚原稿があると思います。これを見れば内容がわかるんですけども、これをかいつまんで、一部は少し増補して、約１時間お話ししていきたいと思います。

タイトルは「平泉藤原氏と北奥武士の統合―平泉型「安全保障」体制の成立」です。なぜ「安全保障体制の成立」ということばを使ったのか。なんせ６月２日に日本の「安全保障」問題でたいへん物騒な、身の毛のよだつような、ちなみに私は64歳ですからまあ大丈夫でしょうが、若い人は、将来心配になるようなことが起こりました。では、そういう問題に関して、平泉はどういうスタンスを持った政権なのか。その当時の鎌倉幕府や平氏政権などと比較したらどうか、ということも課題となってます。

全部を４章立てでお話ししますが、最初は冒頭の問題提起です。因みに、これは学問とはこういうもんだと思って、皆さん聞いてください。研究というものはどうしても、ある見解を批判し、ある説を、いや私も同感ですと、やらざるを得ないものです。批判の対象にするのが、今日いらっしゃってますが、岩手大学の樋口知志先生の説と、それから今日はおられませんが、岡田清一先生の説、それからわが師匠の入間田先生の説の３つです。はじめ私が来たときに御三方の誰もいなかったから、あー良かったと思っていたら、始まる直前に樋口先生が現れまして、ドキッとして、ちょっとプレッシャー感じてまして、返り討ちにならないようにって気をひきしめてます。ただこれは、あくまで研究者の論争で、一つの説を出すことによって、それが議論して学問が進歩するんだと、そういう思いで聴いていただければと思います。

１．奥州藤原氏とはどのような政治権力だったか

さて、前置きが長くなりましたが、奥州藤原氏というのは、どういう権力なのか、これまではどのように議論されてきたのか、というところからお話ししたいと思います。これについて、まず伝統的な、あるいはオーソドックスな見解といえるものを、レジュメの(1)に書きました。つまり、藤原氏の主従制と家臣団編成、その特徴を論じるのがこれまでのオーソドックスな見解といっていいでしょう。では、その結論はどうなのか。で、私のレジュメには、2004年に書かれた岡田清一さんの「奥州藤原氏と奥羽」という論文（上横手雅敬編著『源義経　流浪の勇者』文英堂、2004年所収）、それから2011年に樋口知志さんが出された『前九年･後三年合戦と奥州藤原氏』(高志書院)、論文は「藤原清衡論」でもう少し前に出てますが、そこで書かれたことを引用して、こういう見解が今までのオーソドックスな見解なんだろう、ということで紹介しました。

どういうことが言われているかというと、岡田さんはこう言ってるんですね。「平泉・藤原氏研究が進展し、脚光を浴びてくると、かえって藤原氏の危うさが浮かび上がってくる」。平泉は素晴らしい、でも権力としての藤原氏は意外と脆い、ということです。文治５年の奥州合戦、「鎌倉軍の出発から泰衡の滅亡まで、五十日にも満たない。金と馬、これが平泉・藤原氏の象徴であったにもかかわらず、あまりにあっけない最後であった。これはどうしてであろうか」。よく言われる話です。それで、岡田さんはこういうふうに言ってます。平泉藤原氏の権力というのは、武士権力といいながら、ある

いは主従制といいながら、非常に未熟であり、弱いものだったと。

具体的に言います。北奥、この場合の北奥というのは、平泉以北、北緯39度以北をさします。これに対して、現在の宮城県周辺、これを中奥、福島から南を南奥ということで、表現したいと思います。この北奥地域の武士たちは、藤原氏にとって「数代の郎従」といわれる存在であった。これに対して南奥の武士たちは、言ってみれば目下の同盟者だった。目下の同盟者ですから、いまのアメリカと日本ぐらいの関係です。この大きな落差が奥羽両国を支配したといわれる藤原氏の権力の脆さを表している、と岡田さんは言っています。しかし、もう少し考えてみましょう。そうすると実は北奥も決しては盤石ではなかったというのが、この1189年、文治５年にあった奥州合戦の経過を見るとわかるんです。

すなわち、比内郡贄柵、現在の大館周辺ですが、そこにいた泰衡の数代の郎従といわれた河田次郎、彼は泰衡を殺して自分ばかり助かろうとしました。数代の郎従でも裏切りました。それから、これは藤原氏が滅んだ後、反乱を起こしますが、出羽国北部、八郎潟周辺に、大河次郎兼任という人物がいます。彼はいったん頼朝に降伏しました。彼の弟の二藤次忠季は御家人にまでなります。しかも、その忠季や同じく弟の新田三郎入道は、兄の反乱に加担しないで、一貫して鎌倉方に味方します。こういう状況です。では一族はどうか。問題となるのは志和郡比爪館を本拠とする比爪藤原氏です。

この比爪藤原氏はどうだったのか。実はその惣領の樋爪俊衡は、一戦もしないで本拠の比爪館を焼いて逃げてしまった。そしてもう最後の一兵まで戦ってもだめだということで、降参して、頼朝のもとへ参上した。その後比爪氏がどうなったかは、よくわからないのですね。つまり数代の郎従でも裏切りがある。一族一門も必ずしもあてにはならない。そういう状況があるわけです。このことが大変重要なんですね。つまり南奥が完全な支配下には入ってなかっただけでなく、権力の基盤である北奥も実はこういう状態であった。でもそれを「弱い」というのは、われわれの伝統的なものの見方によるものです。どうしても私たちは武士の歴史を源氏武士団、鎌倉幕府を基準にして、実は源氏武士団だって鎌倉幕府ができるまでは意外に弱いものだったのですが、鎌倉幕府をつくったそれ以後の源氏武士団を基準として、考える癖があるからです。むしろ奥州藤原氏のこういうあり方というのは、平家武士団に似てるんですね。つまり、源氏武士団とは主従関係の質の違いがある。それを「遅れている」と見るのか、それを「武士団のタイプの一つ」と見るのか、その問題だと思います。

ただ、この岡田さんの説を―ちょっと批判めいた言い方になりますが―より徹底したのが樋口さんの説だと思います。「藤原清衡論」での文章をそのまま紹介すると、こういうふうに言っている。「代々の当主の仏教への深い傾倒が、藤原氏の権力構造を古代貴族権力的限界の内に押しとどめ、封建的主従制の原理によって緊密に組織される武門棟梁権へと順調に発展させてゆくことを阻む一つの重大な要因をなした点を否定することができない。そして武家権門として十分な成長を遂げることができなかった奥州藤原氏が、広範な地域の在地領主を配下に組織し強大な武門棟梁権を樹立することに成功した源氏によって滅亡に追い込まれるかたちで自らの歴史に幕を下ろしたことは、それじたいまさに歴史の必然でもあったのである」。ちょっとこういうふうに言うと過激な感じになりますが、これは恐らく伝統的な見方の代表だろうと思います。しかし、レジュメでこうした見方に対する私の印象を書いておきましたが、こうなると、私たちは鎌倉武士団を普遍的な尺度としていいのか、そういうことを考えざるを得なくなる。事実そうした動きはすでに始まっております。平安時代末の武士団の中で鎌倉武士団はむしろ特異な存在だった。その特異な武士団を生み出した原因が、東国社会というもの、その中にあった。それは決して日本社会共通のものではなかった。しかしその東国社会に基盤を持つ鎌倉武士団が全国を制したことは、その後の日本の歴史に重大な影響を及ぼすことになります。

そのことを客観的に見ることが、これからの歴史の見方、歴史の研究では非常にだいじだろうと思うのです。

そこで２番目の見解が出てくるんですね。わが師匠の入間田先生の説で、「奥州幕府論」というものです。聞いた人もいるだろうと思います。これは鎌倉幕府を絶対化しない。それ以外の武士勢力が有していた可能性に目を向けた画期的な説だと思います。そしてこれと同じような位置にあるのが、高橋昌明さんの平氏政権―六波羅幕府論です。日本の武家政権の誕生にはいろんな可能性がある。さまざまなタイプの権力があり、それはそれで評価すべきだ、と。ただ、そこまでは私評価するんですが、入間田先生の結論には賛成できないところがあります。入間田先生はこういうふうに言ってます。「治承・寿永内乱期においては、全国各地の地方豪族が、源平の貴公子を推戴して、自立の態勢（地域権力）をかたちづくり、ひいては」、ここに入間田先生のポイントがあるんですが「天下取りのトーナメント・ゲームに参入する勢いを示していた」、「かれらによる熾烈なトーナメント・ゲームが進行するなかで、決勝戦とも言うべき」いわば日本シリーズですね、「段階まで生き残ることができたのは、秀衡に擁立された義経と、関東の豪族らに擁立された頼朝、という二人の「貴種」ばかりであった」（「藤原秀衡の奥州幕府構想」上横手雅敬編著『源義経　流浪の勇者』文英堂、2004年所収、『平泉藤原氏と南奥武士団の成立』歴史春秋社、2007年）。

私これを読んだとき、こういう感想をもちました。私も「平泉幕府」という言語を使ったんですが、やっぱりこういう素朴な疑問が出てきました。秀衡は天下取りのトーナメント・ゲームに参加していたんだろうか、という疑問です。そして、それに勝ち残って、最後の決勝戦に至ったんだろうか、という疑問です。実際の歴史過程を見ると、必ずしもそうじゃない。そしてもう一つ、いささか意地の悪い質問をすると、これだと、秀衡は奥州の武士を戦場に送って、頼朝との戦争に彼らを投入して、これに勝利して天下を取ろうとした、こう言われたってしょうがない。そういう弱点があるんじゃないか、ということを感じたんです。

以上の２つの検討をうけて、３番目の「以上の議論に見られる特徴と問題点」に進みましょう。まず最大の問題は、源氏武士団と鎌倉幕府を評価の基準としてきたことです。確かに彼らは勝利し、天下を取った。でも、これを絶対視すると、その基準に合わないものは、全部「遅れている」という基準で切られてしまうことになります。にもかかわらず、それを評価の基準とした。そして奥州藤原氏と平泉政権を考えようとした。ここに実は最大の問題があった。入間田先生の奥州幕府論はこの限界を突破しました。突破したんですが、もう一つの大きな限界で止まってしまった。それは「日本国」と「日本国の覇権争い」。しかし奥州藤原氏は日本国の覇権争いを本当にやったのか、ということです。

もう少し詳しく見ましょう。まず第1の問題です。なぜ平泉藤原氏が源氏武士団、この場合の源氏武士団とは、頼義・義家の初期の源氏武士団ではなく、義朝以降、とくに頼朝以降の源氏武士団ですが、それと同じ評価基準ではかられなければならないのか。こういう疑問が出てくるんです。これは樋口さんに対する疑問でもあるんですが、なぜ強大な軍事力編成に成功した権力が「成長した」政治権力なのか。まあ、20世紀、21世紀と12世紀は同一に論じられないって、言われるかもしれませんが、もしそうだとすれば、今のアメリカは成長した政治権力であって、戦後の日本は遅れた政治権力と言われるかもしれない。そしてなぜ仏教による平和を実現した権力が、古代貴族的限界なのか。むしろ鎌倉武士団を生み出した関東社会の特徴―因みに関東社会というのは、古代以来日本国の奥州征服の軍事基地でした―、そういう歴史の中で源氏武士団は成長しました。関東とはそういう独特の世界です。私は関東生まれ、関東育ちの人間だから、そのことはよくわかる。

そして、この関東の社会の中で、頼朝のお父さんの義朝は、現地で熾烈な領地争いをやっている武

士たちの利害の調停者として登場する。しかもその場合、私的な実力、武力、これをもって利害の調停者としてのし上がってる。これが頼朝に継承される源氏武士団を生み出していったという、独特の歴史が存在します。第１の問題はそこです。つまり武士団、主従制を生み出した原理というのは、関東では私的な武力による紛争解決能力でした。それならば東北はどうなのか、本当はこれを考えるべきではないでしょうか。

第２番です。どうして―これは入間田さんに言いたいのですが―「天下取りのトーナメント・ゲーム」に参入しないとダメなのか。今でいうと世界制覇を狙わないとダメなんだろうか、と言いたい。つまり、日本国の覇者にならないとダメなのか。なんか本当に、私はいま高橋富雄先生の説に―かつて20代から30代のころ、これに反発したときがあったんですが、長らく東北に住んで、高橋富雄先生の説に、接近してるんです。

「奥州独立」「北方独立王国」ではどうしてダメなのかって言いたくなる。私は、生まれは関東地方の茨城県で、仙台の東北大学に入って14年過ごして、弘前に行って32年になります。北に北に行って、弘前人として生活する中で、だんだん感じてきたことがあります。そもそも奥羽というのは、日本というこの国の中で、よその、例えば私の生まれた関東、あるいは中部、あるいは西日本と同じ「日本の一地方」なのかということです。この問題は、南の沖縄、琉球と比較すればよくわかります。琉球の歴史を見れば明瞭ですが、琉球は「日本の一地方」ではない。1872年までは独立琉球王国、1872～79年は日本国に服属する琉球藩王国でした。そして1879年に沖縄県が設置されて、東京政府の直轄支配下に置かれます。つまり琉球という場所は、「日本六十六ヶ国」の一国でもなければ「四十七道府県」の一つでもない。もちろん東北は平泉が滅んだ後、名実ともに六十六ヶ国の一つになります。問題はそれ以前はどうだったのか、ということです。平泉を生み出した古代の奥羽はどうだったのか。

この点で、山川の日本史リブレット『奥州藤原三代』の叙述には不十分な点があったと思っています。それは、秀衡時代に平泉政権は天下を三分し、その一つを支配したというふうに書きました。あれは今となってみれば間違いだった。天下三分というと、すぐ思い出すのが三国志ですね。劉備・曹操・孫権、魏・呉・蜀で、劉備のあとを実質的に諸葛孔明が継ぎますが、これは魏を滅ぼして中国の漢王朝を復活させるという狙いをもっていました。つまりこの三国は、文字通り中国の覇権をめぐって争ったんです。では、奥州藤原氏は源氏や平氏と日本国の覇権をめぐって争ったのか。恐らく違う。違うからこそ平家側の相次ぐ要請にも拘わらず、秀衡は出兵しなかった。そしてこれに近いものをアジアの中で探せば、これは亡くなる前の工藤雅樹先生がよく言っていたことですが、唐時代の渤海王朝、あるいは宋時代の西夏王朝が、これに匹敵する。渤海王朝は、自分の国の領土が唐に侵されて、危なくなれば戦いました。しかし、中国に攻め込んで、その覇権を握ろうとはさらさら思っていませんでした。中国が安史の乱で混乱しても、出兵はしませんでした。平泉政権もこれと同じで、日本列島の中で比較するならば、沖縄と同じだと言えないだろうか、というのが私が仙台、青森と住んで、平泉を見ていく中で到達した現在の視点なんです。

つまり、奥州藤原氏は「未熟」でも「遅れていた」のでもない。奥州社会、北奥社会のあり方がそうした権力を生み出した。「仏教への深い傾斜」もそこから生まれたもので、決して代々の当主の趣味や政治戦略の問題ではない。このことを平泉を考えるときに一番に問題にすべきではないでしょうか。そこから本来、「日本列島」という非常に広大な―あの、これもまた感想を言いますと、私、子供のころから日本というのは小さい国だと、よく学校の歴史・地理教育で教わってきました。ところが今から６年前になりますが、岩手大学の藪先生の好意でニンプロというプロジェクトで中国の寧波

に行ったときにつくづく思ったんです。日本は広い、と。これはとくに帰ってくるとき強く感じました。上海からひと飛びで、博多上空まできました。そこから仙台上空までがいかに長かったか。実は李王朝時代の朝鮮王朝の大臣のトップ（領議政）だった申叔舟という人物が記した『海東諸国記』（1471年成立）という書物の中で、同じことが書いてあるんです、日本という国は、北は黒竜江の河口から南は済州島の南へ至る大国であると。この広大な日本の中で、各地域が中央ではない、ヤマトやアヅマではない地域が、それぞれ持っていた可能性があったはずです。琉球はその可能性を発展させて独立王国を作りました。奥羽もまたある段階までその可能性を持っており、しかも平泉は軍事力一辺倒でない政治権力を誕生させた。そのことに注目することが、平泉そして日本の歴史を考えるときもっともだいじだろうと思います。

２．古代の北奥羽と平泉藤原氏の政治的求心力
―「日本の一地方」ではないその自律性と独立性、そして平泉藤原氏に奥羽の武士・領主が期待したもの―

２つ目の話に進みます。ここで問題にしたいことは、古代の北奥羽―この場合北奥羽というのは、北緯39度以北、つまり平泉以北、奥六郡及びそれ以北、出羽では山北三郡以北の地域ですが、この地域の特徴は何か、そしてこの地域で平泉藤原氏が武士の棟梁になったのは、何故か。何故に平泉藤原氏が政治的求心力を持ちえたのか。この点です。

まず第１。東北地方のど真ん中を東北を南北に分ける北緯39度ラインが走っています。ちょうど関山丘陵の真上を、日本海側は鳥海山の近くを通っています。この北緯39度ラインから北が藤原氏のいわば本領にあたる地域です。ここから南、あいだに中間地帯がありますが、これはいわば在地の勢力を服属させているだけの地域です。そして平安時代の10世紀以降は、この北の地域は、陸奥は鎮守府胆沢城、出羽は秋田城、この両城の管轄下に置かれ、国府支配から切り離されていました。この北緯39度ライン以北の北奥羽とはいったいどういう性格の場所なのか。最近注目されている特徴の第１は、何よりも荘園がないということです。

日本の中世社会というのは、荘園と公領から成り立っており、荘園公領制社会といわれるように、土地の半分は荘園。あと半分が公領として残った土地です。ではどうして荘園ができるかというと、その地域の在地領主、在地領主でも武士でないものもおりますが、彼らが所領を形成する中で領地争いが頻発する。それを解決するために彼らは中央の権門・貴族に土地を寄進した。それは天皇家でもいいですし、藤原氏でも、大寺社でもいい。彼ら権門が持っている権威と政治力に、在地の所領問題、領主間抗争の解決を期待したからです。ところが北奥羽には荘園が全くない。つまり北奥羽では、京都の天皇家、摂関家あるいは比叡山などの大寺社、それが在地の問題を解決する権力・権威であるとは思われていなかったことになる。京都の権力・権威は北奥羽の問題を解決する権力ではなかったというわけです。だから荘園ができなかった。因みに南奥羽にはゴソっとできます。北奥羽と南奥羽にはこうした厳然たる違いがあるんですね。10世紀以降の多賀国府支配下の地域と鎮守府支配下の地域の差というのは、11世紀後半以降もこういうかたちで生き続けるんだ、ということです（図１参照）。

では北奥羽では何が権威なのか。北奥羽の経済システム中でだいじなものは何か。この地域の主要な産物は何か。日本の中央に出して、見返りにいろんなものを引き出すことのできるものは何か。それはこの地域の「国の土貢」と言われますが、奥六郡一帯では何といっても金ですね。これは大々的に生産をやるわけです。それから北奥では馬、そして最近注目されている北海道のさまざまな産物の

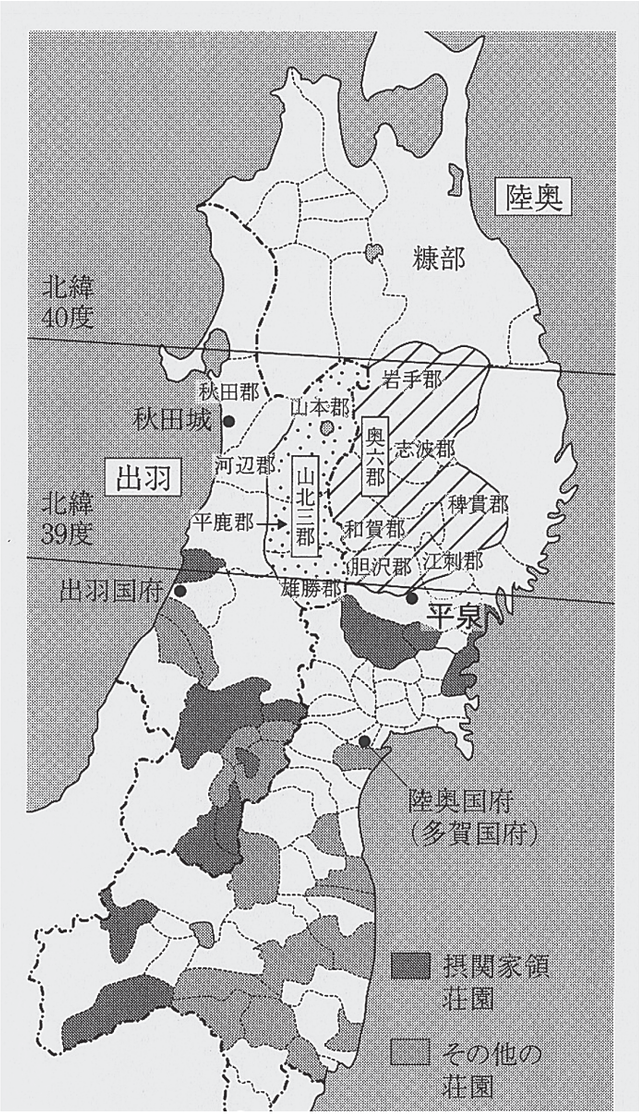

図１ 古代末期の奥羽（奥六郡・山北三郡、荘園の分布、北緯40度ライン・39度ライン）

交易がある。この富、この生産・貢納、交易のシステム、これをどう機能させるか。これを機能させることによって、多くの富を手中にできる。そしてそれは在地の領主の権力の基盤になる。これをだれが保障するのか。古代においては、鎮守府と秋田城でした。この鎮守府と秋田城を握ったのが、奥州藤原氏だったのです。それが奥州藤原氏がこの地域で、求心力を持ちえた理由であります。もう少し詳しく言えば、安倍氏の奥六郡の主（あるじ）、清原氏の出羽山北の俘囚主という地位、それを継承した奥州藤原氏が北奥羽の主人となった、ということになりますね。

もちろんこの地位は本来、中央政府がしっかり押さえておりました。また武門源氏が狙いをつけて、そのためしょっちゅう争いが起こるんですが、最終的に中央政府は、前九年・後三年合戦を経た11世紀の最末期に、ついにこういった北奥現地の支配権を奥州藤原氏に委ねるという政策をとるようになる。それまで頻繁に武士を任命していた陸奥守、出羽守あるいは鎮守府将軍等の官職に一切武士を

任命しない。かわって文官貴族を任命し、しかも陸奥守と鎮守府将軍を兼任にする。そして実際の現地の支配は、奥州藤原氏に任せるという体制をとるようになった。その結果奥州藤原氏がこの北奥の現地の政治紛争の調停者となり得たわけです。

２番目、このいわば「北奥羽の自治」体制と対応する、もう一つ重要な問題があります。それは神々の支配の問題です。これは私自身、長い間この問題に全く気付かなかった。本当に恥じ入るばかりなんですが、現在残る平泉関係史料、あるいはその後の北奥羽の史料を見ていくと、以下のような歴然たる事実があることがわかるんですね。結論的に言えば、ちょっと過激なものの言いようですが、「北緯39度以北には、日本国の神々の体系が浸透しなかった」。日本国の神々の体系をここに持ち込んだのは、奥州藤原氏滅亡後の鎌倉幕府です。平泉時代までの北奥の宗教とは基本的に、エミシの神々の体系、そして仏教、この２つだった。

それはどういうことかというと、日本国の神社の体系、神々の体系は、大体11世紀末～12世紀の時期に出来上がります。その中心となるのが王城鎮守二十二社という体系で、王城鎮守、都である京都を守る、そして日本国の王権、そして支配層全体、これを守る神社と神々です。この二十二社、トップは言わずと知れた天皇家の神、伊勢神宮、第２位が軍神である石清水八幡宮、第３位が賀茂社、京都守護の神です。また、順位は７位なんですが、実質的に第4位を占めたのが春日社、藤原氏の氏神でした。

実はこの4社は平泉にない。それ以外の中央系の神社は、いくつかあるんですが、この4社だけはありません。ないどころか奥州藤原氏は断固これを拒否します。考えてごらんなさい。初代清衡は、源氏のために自分のお父さん（藤原経清）が殺されるという目に遭ったんです。だれが八幡宮をもってきますか、って言いたくなる。

実は奥州藤原氏支配下の北奥羽でも、藤原氏が撤去しなかった八幡宮がありました。これを撤去すると、やはり日本国中央政府と問題を起こします。胆沢城鎮守府八幡宮、今でもありますね。平泉以前に勧請されたもので、これが残ったんです。しかしそれ以外には確認できない。もう一つだいじなのは春日社です。藤原清衡は、お母さんが安倍頼時の女、そして義理のお父さんは清原武貞で、当初清原清衡と名乗っていました。そして清原氏の遺領である奥六郡・山北三郡を受け継ぎ、北奥羽全域の支配者となった後、藤原と改姓します。それならば、氏神の春日社も持ってきてよさそうなんですが、持ってきませんでした。私はこの話をよく、いろんなところで言うんです。それは清衡は、藤原と改姓したけど、これは対中央政治交渉のために有利とみたから改姓したんだ。自分が藤原の一族だとはさらさら思っていなかったに違いない。恐らく清原か安倍だと思っていたのだろう、と。じゃあ、平泉にどういう神様を呼んだのか。

それは一言でいうならば、京都において異端派であったか、あるいは傍流であった神々を平泉に勧請したということです。まず北野天神＝天満宮。いわずと知れた藤原氏に圧迫された菅原道真を祀る。次に祇園、それから稲荷社。この三社はいずれも御霊社と言いまして、中央の権力争いに負けたりして、非業の死を遂げた人たちを、民衆が祀った神で、これを持ってくる。そして、それ以外では、縁の深い延暦寺との関係で日吉社と白山社、そして熊野社、それに金峯山社。これらは京都ではもちろん大きい勢力をもっていますが、天皇家を中心とする日本の神々の体系の中からいえば傍流なんです。注目したいのはこのことなんですね。

そして、こういう日本国中央の神々の侵入を拒み、かわりに、宗教政策として何を持ってくるのか。それが仏教なんです。しかし、―これは入間田先生が最初に言ったことですが―当時の京都の仏教界で大きな力を持っていた真言密教ではない。例えば毛越寺です。一般に毛越寺は白河天皇が創建した

京都白河の法勝寺をまねたと言われます。しかしこの法勝寺の本尊は、真言密教の主尊大日如来でした。しかし毛越寺の本尊は薬師如来です。また法勝寺には阿弥陀堂もあるのですが、もう一つ重要な堂宇として五大堂があります。五大堂、松島が有名ですね。これは五大明王を安置している。五大明王というのは、不動明王を中心に、大威徳明王・降三世明王・金剛夜叉明王・軍荼利夜叉明王、この５つの明王からなる。京都の東寺の講堂にある五大明王像は有名です。これはいったいどういう性格の仏様なのか。明王というのは大日如来を守る密教の仏なんですが、この五大明王というのは、実は夷狄征伐の仏様なんです。のちの鎌倉幕府の記録を見ると非常に面白いことに気が付きます。この五大明王の前でやる密教の修法を「五壇護摩法」といいます。これを鎌倉幕府は、鶴岡八幡宮で2回やった。第1回は弘安の役。第2回目は、私の住んでいる青森県で鎌倉時代末期に起こった安藤氏の乱という事件です。この安藤氏の乱は鎌倉ではエゾ蜂起と言われていた。つまりエゾ調伏のための修法だったわけです。こんなものを奥州藤原氏が入れるわけないんですね。

つまり京都の当時の主流であった神や仏、この系統のものは入れない。入れるものは何か。さっきから菅野さんが盛んに言っていた天台宗の根本経典である法華経ですね。そして、これはわが師匠の入間田先生が強調していることですが、東アジア世界ではこれこそが仏教の主流中の主流、「東アジア世界のグローバルスタンダード」といえるものだった。しかもこの法華経というのは、―もちろん限界はありますよ―限界はあるんだけれども、経典の下では万人が平等、女性でも往生でき、そして、エミシの地も和人も対等である。こういう主張をもっているのです。これが平泉が導入した仏教の教えです。ですから平泉仏教というものは、京都仏教とは大きく違う。ようやくそのことを、多くの研究者が気付くようになりました。そして日本国の主流の神々ではない、傍流の神々を入れ、「東アジアグローバルスタンダード」の大陸直系の仏教を柱とする。これによってもとからのエミシの信仰が根強く勢力を張っているこの北奥羽の世界―エゾ俘囚の世界を統合する。因みにこういった国家統合のあり方というのは、渤海王朝によく似ております。渤海王朝っていうのは、粟末靺鞨部の有力な部族の首領大祚栄（テジョヨン）が高句麗族の遺民や靺鞨族を集めてつくった国で、靺鞨族の従来の社会をほぼそのまま受け継ぎ、そこに唐からさまざまの文化を入れ、とくに仏教を柱に導入して、これで諸部族を統合した国でした。こういう点でも平泉政権と共通している。

つまり南の日本社会とは違う社会、違う政治、違う文化、これが平泉にあったんだ。そして日本の都京都のさらにおおもとの本場＝中国のものを直輸入する。だからあれだけの素晴らしいものができた。そして中央政府に対して決して屈しない、自主独立の立場を取る。これが平泉政権と奥州藤原氏の権力の特徴で、この二つが連関して北奥羽の独立性を維持し、奥州藤原氏の独立性を支えていたのだと考えるのであります。

ところで先ほど菅野文夫さんが、現在の岩手県志波町比爪の地に勧請された走湯権現の話をしました。非常に面白く聞いていましたが、その点でいうと、ああなるほど、こういうとよくわかることがあるということを、私も気付いたんです。柳之御所遺跡の発掘で平泉の本格的な研究が始まったとき、平泉から大量に出土する渥美・常滑の陶器は、いったい誰が運んだのかということが問題になりました。最初みんなが考えたのは、東国の海上に巨大な勢力を持つ伊勢の神人たちでした。実際、伊勢の神人は多賀城までは来ています。モノが出ています。しかしその後の菅野成寛さんの研究で、伊勢神人は来ていない、担い手になったのは熊野の海民勢力であることが明らかになりました。この熊野。繋がっているわけですね、伊豆の走湯権現の勢力と。でも走湯権現がここに勧請されたのは、その傍らに清衡が道祖神社を斎ったという記録から見て、清衡以前のことで、しかも伊豆走湯権現は伊豆国内の神社だけども相模国との境に近い伊豆山（現在の熱海市）にある神社だから、私はそこに源頼義

か義家の力が絡んでいそうな感じがします。それは具体的にはまだわかりませんが、ただ最終的に、走湯権現は熊野の傘下に入り、その中で平泉政権下の北上川流域にも存在した。つまりここでも、太平洋海運は東国社会に圧倒的な力を持つ伊勢ではなくて、熊野によって担われていた。そこには奥州藤原氏の選択が働いている。では日本海はどうか。ここでは日吉・白山の神人勢力が担い手として強調されております。しかし実は、日本海は確かに日吉社および白山社の神人の勢力圏ですが、決して彼らの独断場ではないんです。ここに同じように並ぶ力を持っているのが賀茂社です。奥州藤原氏はこの賀茂の勢力は断固拒否します。次に九州。奥州藤原氏は対宋貿易を活発にやります。その担い手については菅野成寛さんが、日吉社の神人―延暦寺とつながった―勢力に注目している。でも九州には八幡社の石清水八幡宮神人の勢力も強力に入っていた。しかし平泉はこれとは結ばない。つまり平泉の交通体系には政治の問題も絡んでいる。そして京都とは違う都鄙間交通体系、これを意識的に作り上げようとしたのではないか。宗教と政治と、そして交通網です。これが東北の自立性の基盤になっている、ということに注目する必要があります。

３．北緯40度ラインの北と平泉武士団の特徴

3つ目に進みます。こうした地域に生まれた平泉武士団の特徴はどこにあるのか。

それを見るために、この奥六郡よりもさらに北の地域、つまり平泉藤原氏の時代になって日本国の中に編入された、私の住んでいる青森県地域や、あるいは泰衡を裏切った河田次郎、彼が住んでいたその南隣の比内の地域、最近の研究ではこの地域に大きな力を持っていたのは、平泉の藤原氏本宗家ではなくて、奥六郡北部の志波郡に本拠を置く比爪氏ではないかと、羽柴直人氏が言ってますが、この北奥地域と奥州藤原氏の関係は、どうなのかということが問題になりますので、そこに進みます。

実は、この地域の武士との関係から平泉武士団の性格が見えてきます。カギは、平泉の支配下に入る前と、入った後で、どう変化したかということです。平泉の支配下に、北緯40度以北の北奥地域、つまり奥六郡以北の地域が入るのは、11世紀末期頃でした。それ以前の北奥はどうだったかというと、私たちは防御性集落の時代と呼んでいます。弥生時代の西日本にあったような環濠集落、高地性集落、これが10世紀半ばから11世紀の北奥地域をびっしり埋めつくしていた（図２参照）。つまり、弥生時代の西日本では、いくつかのムラが統合されて、小さいクニができ、さらにそれが統合されて、邪馬台国みたいな国ができていった。そういう時代が、もちろん社会は全く同じではありませんが、この地域にあったということが、今言われています。その段階の北奥地域の、安全を保障する体制は何だったのか。これは実はムラ連合でした。文献史料には「部」というのが出てきます。これは、前九年の合戦のときに出てくるんですが、源頼義が安倍氏を討つために、その背後にいる奥地の俘囚に働きかけた。これは菅野文夫さんの研究ですが、それをどうやったかというと、気仙郡司の金為時に命じて、海路、北奥に行かせる。そこに出てくるのが、鉋屋部・仁土呂志部・宇曽利部の３つの「部」です。この部というのは、中国の王朝が北方の民族集団のグループを呼んだもので、例えば靺鞨族の場合、七つの部があるんですが、鉄利部とか黒水靺鞨部とかいうものと同じで、人間集団を指すものとみられる。ちなみに宇曽利部は現在の下北、仁土呂志部は上北、鉋屋部は三戸辺りのエミシのグループと考えられます。エミシのグループ、実体はムラの連合ですが、当然この三部以外にもいくつかあった。おそらく鹿角、比内、それから能代周辺、そして南津軽、東津軽、北津軽それに外ヶ浜。これに先の三部で合わせて少なくても十部。こういうかたちでムラ連合が形成されていた。そしてムラ連合同士で連合したり、抗争したりしてきた。ときには安倍氏などとも結びつく。こういう状態だったの

図２　北の防御性集落遺跡分布図

が、藤原氏の支配下に入ることによって、解消するわけです。

というのは、12世紀になると防御性集落が消えます。消える代わりに、これもさきほどの菅野さんの話でも出てきましたが、奥大道に沿って平泉系の遺物を出す遺跡が出現する。八重樫忠郎さんが「平泉セット」と名付けていますが、平泉の柳之御所遺跡で出土する陶磁器の組合せ、すなわち、手づくねかわらけと、白磁四耳壺・渥美の刻画文壺・常滑三筋壺のセットです。これは何かというと、手づくねかわらけを使って宴会をやって、そのそばにお酒の入った壺の名品―威信財っていうんですが―これを置く。そういう儀式のためのものです。それは平泉の柳之御所（平泉館）で武士たちを統合するための宴会儀礼で用いられた。そういうものを導入した文化が奥大道に沿って広がっていく。こうしたことから奥州藤原氏の時代になって、この地域の領主たちが藤原氏のもとに統合されていった。藤原氏の政治を受け入れていった。そして恐らく彼らは奥州藤原氏の家臣化したんだ、といわれてきた。

それだけじゃない。この「平泉セット」が出る遺跡というのは、東北広しといえども、そう多くはないのですね。北上盆地では平泉以外では比爪氏の本拠であった比爪館くらい、そして、この北緯40度以北の地域、とくに津軽と外ヶ浜に集中している（図３参照）。ここは平泉直轄領と言ってもいいところだ、と八重樫さんは言っています。問題はこの平泉直轄領の性格です。そしてこの地域の武士たちをまとめた藤原氏の組織形態です。これが実はよくわかっていない。平泉直轄領といった八重樫さんも、その内容は言っていない。しかしよく調べてみると、先ほどのように、意外にアテにならない、ということになってくる。この地域の武士で名を遺したのは、先ほど言った比内の河田次郎、

図3　平泉セット出土遺跡の分布（八重樫忠郎氏作成の図に加筆、修正）

八郎潟周辺の大河兼任一族、それに後の有名な十三湊の安藤氏の祖先とみられるものも、この時期には生まれてるみたいです。

問題なのは、彼らは経済的には平泉を支えましたが、政治的・軍事的には決して平泉の強力な支配下にあったわけではないということが、河田次郎や大河兼任の行動を見ればよくわかることです。『吾妻鏡』によれば、鎌倉軍は28万４千騎。わが師匠入間田先生の表現では、日本六十六カ国総動員令を発して、集めた軍勢が、奥羽両国になだれ込んできた。東山道を通る大手軍、太平洋側を通ってくる東海道軍、そして日本海側を通ってきた北陸道軍、合わせて28万４千騎が東北の地に侵攻し、比爪の陣ケ岡で合流するわけですね。この鎌倉軍との戦いで、平泉方ももちろん軍勢を動員します。しかし『吾妻鏡』を読む限りでは、奥羽両国17万騎と号していますが、例えばこの平泉直轄領であった北奥の比爪から北の武士たちが動員され、投入されたかというと、投入されませんでした。そのような軍事動員はなされなかったということです。

つまりこの地域の人々は、平泉と運命を共にしなかった。鎌倉軍の進攻の時に主力軍の戦いが行われたのは、福島盆地の南の入口、石名坂、関屋のラインと、もう一つは、福島盆地の北、白石盆地の入口の、阿津賀志山です。阿津賀志山には西木戸太郎国衡が大将になり、それに金剛別当秀綱がついて、２万騎の軍が陣を敷きます。またその後方には平泉からたくさんの武士が出ます。でもどうみても、そこに動員された武士は、奥六郡南部から南の武士たちです。北奥の武士たちは動員されておりません。鎌倉幕府が平家を攻めるために、あるいは後に承久の乱で後鳥羽上皇を攻めるために、その勢力圏内の武士に軍勢動員をかけたのに比べれば、雲泥の差です。それを平泉の弱さと見るのかどうか。しかしこれは、北緯40度以北の平泉直轄領であった地域の領主たちに対する奥州藤原氏の支配が、実は緩やかなものだったということを間違いなく意味している。

つまり、彼ら北奥の武士たちがどうして藤原氏に服属して家来になったのか、郎従になったのか。それは自分たちの世界の問題の解決を藤原氏に期待した。所領紛争、その調停、あるいは自分たちの富の確保、その保障、それを期待したからであって、何も藤原氏のもとに集まって、強力な軍団を作って、日本の中央で戦うために家来になったんじゃない、と恐らく彼らは思っていたでしょう。言ってみれば、奥州藤原氏によるこの地域の紛争調停と、北方交易の管理、それに加うるに平泉仏教が求心力になって、藤原氏に従ったものだ。平泉武士団というのは、こうした奥州藤原氏のもつ政治的・経済的・文化的求心力によって、そのもとに統合された武士たちの集団であった。

それに較べると鎌倉武士団というのは違う。まず、源氏武士団が、度重なる奥羽での反乱鎮圧のために派遣され、その中で鍛えられた軍団でした。後には平氏との戦いの中で、あの平氏との戦いだって、最初のころは、西に派遣された武士たちが、関東に帰りたくて、全然志気があがらない。そういうことが起こる。その戦いの中で鍛え上げられていったんですね。軍隊というのは戦の中で鍛えられます。いいか悪いかは別として。戦を繰り返せば、強力な軍隊が出来上がります。鎌倉幕府の軍隊というのは、そういう非常に特異な、その代わり強烈な主従関係を持っている、特異で強力な軍隊だったと私は思っています。つまり質の違い。この違いが奥州合戦によく表れるわけです。

平泉の軍勢は奥羽両国17万騎と言われます。でも『吾妻鏡』で見る限り、その戦い方はどうなのか。出羽国では庄内で田河太郎行文、秋田では秋田三郎致文、彼らが戦った。東海道つまり太平洋側は記録に残っておりません。大手筋の東山道、ここでは先ほど言った福島盆地の南と北に強力な防御陣地が構築され決戦が行なわれた。まず、福島盆地の南の入口に佐藤庄司元治・河辺太郎高経・伊賀良目七郎の軍団。そして阿津賀志山の国衡と金剛別当秀綱の軍団。そして泰衡は国分原鞭楯に本陣を構え、あちこちに兵を置いた。これは戦のやり方としては全然ダメで、外道中の外道ですね。戦力の分散配

置の見本みたいなものです。こんな戦いをすれば負けるに決まってます。まあ言ってみれば、北奥の軍勢を集められなかったということとあわせて、領主たちがそれぞれの本拠地でバラバラに鎌倉軍と戦うという戦い方をしていた。鎌倉方がやったような兵力の集中動員・集中配置をやれなかった。

もちろんそれは義経を殺しちゃったことも原因でしょう。でも私は、むしろこれは、平泉軍というのはもともとそういうことができる軍隊ではなかったんだ、と考えています。だから、後から考えれば、内乱初期の頼朝がアップアップしているときに、清盛の要請に応えて、秀衡が出兵して、鎌倉を叩いていれば、後になって滅ぼされることはなかったんだ。けれども出兵しなかった。これは秀衡の平和主義というだけでなく、恐らく平泉軍というのは、奥羽の防衛はやっても、よそを攻めるということはしない、そういう性格の軍勢だった。それがなんで平泉に結集したかっていう理由が、先ほどのことだと思います。そもそも頼朝軍主力と戦った福島盆地での戦いを見ても、佐藤庄司元治軍と西木戸太郎国衡軍は、統一的な指揮のもとに戦ってはおりません。バラバラです。つまり平泉軍というのは、藤原氏の本宗家に、これだって泰衡軍と国衡軍の連合体です。それに比爪家の軍、佐藤庄司元治の軍、田河氏の軍、秋田氏の軍、こういったものの連合体で、これが奥州藤原氏の軍団の実態であった。高橋昌明さんは平家の軍隊を「連合艦隊」と呼んでいます。平家の本宗、清盛の長男重盛の小松家。次男宗盛の家、それから池大納言頼盛の家。そういった家々はみんな独立している。それぞれに大将がいます。これと同じだと。そしてこういう武士団のあり方というのは別に「遅れている」わけでも何でもない。むしろ源氏が特殊なので、こちらの方が当時の日本の武士団の極々普通のあり方だった。

ですから、ちょっと夢を見ますと、平泉が勝つ可能性はなかったのかなァって、つい夢を見るんですね。その場合、正面からの決戦では勝てないでしょう。平泉がもしあの文治５年の奥州合戦で勝つとしたなら、秀衡が生きていたらできたかもしれないが、義経じゃ無理かなと思うんですが、アテルイが紀古佐美を破った戦い方しか、恐らくないだろう。それは文治５年奥州合戦の記録を見るとよくわかります。阿津賀志山で国衡が負けたのが８月10日、その３日後に頼朝軍はいっきに北上して多賀国府を占領する。しかし多賀国府を占領してから、平泉に入るまで９日かかっています。これは頼朝軍があちこちに分散して、各地で戦いをやった結果です。恐らく宮城県北部、いよいよ平泉の前面に達したときに、かつてのアテルイの時代に、伊治公呰麻呂の反乱が起こったように、地元の武士たちが地の利を生かし、強力なゲリラ戦を展開した、そうした可能性がある。

恐らく勝つとすれば、こうしたアテルイたちのやり方しかない。あるいはずっと後の話ですが、豊臣秀吉が朝鮮を侵略した際、日本では文禄・慶長の役と言いますが、韓国では壬辰倭乱（イムジン・ウェラン）・丁酉再乱（チョンユ・ジェラン）と言います。そのときの朝鮮側の戦い方です。この戦いで、ほぼ朝鮮全土を占領された朝鮮側がどうやって秀吉の侵略軍を打ち破ったか。一つは海上戦闘です。有名なイ・スンシンの水軍の戦い。もう一つは次のような事実がある。興味ある方は地図を見ればわかるんですが、豊臣秀吉の軍隊は、上陸後いっきに首都漢城を落とし、西は平壌、東は朝鮮の北端まで攻め込んだ。ところがこのときどうしても占拠できなかった地域が１か所あった。全羅道（チョルラド）です。ここは韓国の穀倉地帯なんですね。秀吉の軍勢はここに入ろうとするんですが、朝鮮の義兵（義勇軍）は、ここを取られたらおしまいだと、ゲリラ戦を展開して、ついに秀吉軍の侵入を阻止した。そのために秀吉の軍はイ・スンシンの戦いと相まって、糧道を断たれてついに撤退に追い込まれた。これだと思います。平泉の活路は。ここにあるのは軍隊の性格の違いです。

ということで持ち時間も少なくなりました。最後に行きます。やはり『吾妻鏡』っていうのは慎重に扱わないといけません。私はある段階まで、『吾妻鏡』に記された泰衡に関する記事を信用していました。はじめてそのおかしさに気付いたのは、ここにいらっしゃる誉田慶信さんで、今から20年

以上も前なんですが、『歴史読本』という雑誌で奥州藤原氏の特集をやったときに、泰衡を分担して、それまで見逃されていた実像を論じた。ふつう泰衡というのはお父さんの秀衡が死んだ途端に動揺して、父との約束を違えて、義経を殺しちゃったみたいに言われてますよね。でも父の秀衡が死んでから、泰衡が義経を殺すまで1年半あるんですね。その間、実は泰衡は、父秀衡の遺言を忠実に守って、義経を立てて、鎌倉との戦いの準備をしてるんです。決して泰衡は愚か者ではないんです。高橋克彦さんのNHK大河ドラマ『炎立つ』ではそういう描き方していましたが、頂けなかったのは一番最後、泰衡が馬に乗って「わしはこれから旅に出る」って平泉を去ってゆく。そんなバカなことがあるわけないんですよ。同じ高橋さん原作の大沢たかおさんのアテルイのドラマも最初は良かったんですが、最後のアテルイが敗れるシーンは、わが家ではあんなことはあり得ないと、話してます。それは何かというと、田村麻呂に胆沢を占拠されたあと、モレと一緒になって500人の部衆を率いて、田村麻呂の軍勢に正面攻撃を掛けましたよね。これはまるでむかしの日本陸軍の白兵突撃と同じですね。あんなことやるわけはない。ゲリラ戦以外、やる方法がないんですから。そして現実に、アテルイはやりませんでした。そうではなく500人の部衆を率いて、独自の勢力を維持していたのを、田村麻呂が説得し、降伏させたあと都に連れて行って殺してしまったんです。むかしの『炎立つ』ではそうでした。

でも、泰衡を愚か者と描かなかったことは、私は非常に感心しています。誉田さんが最初にそのことに気付いて、私の師匠の入間田先生もそれを言い、奥州幕府論ということを言い出して、泰衡を再評価しようとした。こうした泰衡の生き方を考えると、泰衡が河田次郎に殺される前に、頼朝に手紙を送って、義経を匿ったのは父のやったことで、自分は何も関係ない。奥羽両国はすでに頼朝の進退なんだから、自分を許して御家人にしてほしい。それがダメならば、命だけは助けてくれ。比内のあたりに返事の手紙を落としてくれれば、そんなこと言えば比内にいるってことがわかってしまいますが、それにしたがって出頭すると述べた。この手紙はどう考えたって『吾妻鏡』のウソです。菅野文夫さんがそこでさかんに首をかしげてますので、この辺もまた議論なると思いますが、泰衡の再評価というのを、私はしたいと思っています。

4．平泉藤原氏と北奥武士
―「平泉型安全保障」体制―

ということで最後の締め括りにいきます。

奥州藤原氏の武士団は、何をもって北奥の武士団を統合していたのか。その特徴はどこにあるのか、ということを話していきましょう。それを私は「平泉型安全保障体制」の成立という概念で評価したいと思います。それはこういうことなんです。平泉武士団というのは、源氏や京都の平氏の武士団と同じではない。源氏や平氏の武士団というのは、日本国の王権を守る、あるいは日本国の首都、京都を警衛する戦士集団、職業戦士集団として成長した。最新の武士研究の結論です。しかし平泉はそれとはまったく性格が違う。本当につくづく思うんですね。北奥の武士たちは、何で俺たちが京都を守んなきゃいけないんだ、何で中央の戦に参加しなきゃいけないんだ、と思ったに違いありません。そして源氏の武士団は、さらに頼朝が東国で反乱を起こした後、反乱軍政権の軍事力として成長した。しかも義仲軍や平家軍との長期の戦いに耐える、長期遠征に耐える戦士集団として鍛えられていった。そして鎌倉幕府軍は、最終的には日本国軍となる。これを担う戦士集団の主要任務は、京都大番役であり、その他の御家人役です。しかし平泉の武士団はそれとは違う要因によって形成された政治・軍事集団だということを、まずきちんと押さえておく必要がある。

それは何よりも奥州藤原氏が、第1に、北奥羽地域の領主層の所領支配と富の獲得を保障する権力であった。そのためには何も京都に出ていく必要はありません。第２に、領主層相互の紛争の調停と解決を担う。ですから必要以上の軍事力は必要ない。第３に、北奥地域の交通・経済システム、この機能を守る。そのためには、伊勢神宮、伊勢の神人、八幡宮の神人、賀茂の神人、こんなものは要りません。そして第４に、北奥地域全体の政治的安定を維持する。このために行なわれたのが、柳之御所遺跡（平泉館）での平泉セットを使った宴会儀礼、そして北奥のいくつかの政治拠点で行われた宴会儀礼、あるいは比爪館での宴会儀礼、これなんだろうと思います。こうした役割を奥州藤原氏が担うことを期待して、藤原氏のもとに統合された在地支配層の集団が平泉の武士団であった。言ってみれば、本来北奥羽の―北緯39度以北、奥六郡以北の―「平和」と「安全保障」を担う主体かつシステムとして、奥州藤原氏を首長に仰いで形成されたものであった、と思います。そしてその中で、日本国の神々に代わる平泉仏教、東アジアグローバルスタンダードの平泉仏教が、法華経の下では万人は平等である、平和こそが大切である。そしてエミシの地も和人の地も対等だ、という思想のもと、この「平泉型安全保障」体制を支える中心の柱となり得た。

「平泉型安全保障」という、この言葉を思いついたのは、古関彰一先生という獨協大学の憲法制定史の先生の『安全保障とは何か』（岩波書店　2013）という著作のおかげです。以前、弘前の5月3日の憲法集会に古関先生を呼んで講演をしてもらった縁で付き合いがあり、本を頂いた後、本の感想に絡んで、メールのやりとりをしたら、どういう思いでこれを書いたかということを本人から聞きました。それと合わせてお話しします。

古関先生はこの著書の中で、こういうことを言ってるんですね。「安全保障」というと、私たちはすぐ安保を思い出す。でも違うんだと。安全保障という概念は、まず近代国家の歴史の形成期に生まれたもので、一番最初にこれ言い出したのはベンサム。あの「最大多数の最大幸福」ということをいった人物です。続いてカント。ではそれはどういうことかというと、本来それは「人間の生命・財産・生活・安全を保障するシステム」として唱えられたものであった。だからそれは、国家権力から人間―それは個人であり集団でもあるのですが―それを守る人権の概念であった。今の安全保障とは全く性格が違う。ところが20世紀後半、第２次世界大戦以降になって、とくにこれを強力に推進したアメリカによって、「国家安全保障」という国家主権によって行使される軍事力を主体とする制度に変貌してしまう。それでも当初は、国家が国民国家としての性格をもっていたからよかったけど、最近では国民から遊離した―アメリカはどうもそうらしいんですね、日本もそうなのか、どうか―国民なき国家権力・機構、国の政治家、支配者だけが独走する、そういう国家の安全保障に堕落してしまったと古関先生は言っております。

もはやいまや安全保障というのは、本来の意味とは全く逆の平和の対立物になってしまった。でも古関先生は、我われは希望を失うことはない。日本やアメリカを見てるとそうだけど、その外側では、すでに本来の原点に戻る動きが起こってきてる。「人間の安全保障」。面白いことにアメリカの隣国のカナダが、これを強力に主張している。ここにはイデオロギー超えたものがある。これがだいじなんです。そしてそれは日本国の外側ではすでに主流になりつつある。私たちの国のドアをすでに叩いてるんだということを、この本で言っています。私は大変な勇気を得ました。古関先生に謝辞を送るときに、私はこれを読んで平泉を思い出しました。平泉というのは、まさにそういう安全保障じゃなかったのか、ということを述べました。平泉と比較するとわかるんですが、鎌倉幕府と鎌倉武士団というのは、一つの特殊で特異な権力だと思います。確かにそれは日本国の国家権力を握り、その後の日本国の歴史に決定的な影響を及ぼした。しかし本当は、いくつかあった可能性の一つにすぎない。これ

まではこの特異な尺度からのみ日本の歴史を評価してきたが、奥州藤原氏と平泉は、そうした歴史研究の弱点を克服するための重要な手がかりを提供している。

そしてもう一つ重要なのが、地方の歴史ということの中身です。私たちはなかなか「日本国全体の中での一地方」という視点から抜け出せない。でもいまこそそこから一歩踏み出すことが求められている。琉球が日本列島の中のただの「一地方」ではなかったように、わが奥羽も少なくともアテルイの時代までは、日本国の「一地方」ではありませんでした。そしてその歴史は奥州藤原氏の時代まで引きずっております。平泉は「日本国」や「日本国中央」の歴史から、地域の歴史、地方の歴史を本当の意味で解放する役割を果たすんじゃないか。

で、そこまで行ったときに、平泉研究というのは、単なる東北の歴史ではなく、都市平泉の歴史でもなく、日本史のそういった可能性を切り開くテーマなんではないか、という思いを強く持つに至ったところです。

以上、現在、平泉に絡んで自分が考えているところを述べさせて頂きました。どうも長時間有難うございました。（拍手）